
メルマガ

NPO 法人市民福祉団体全国協議会・復興支援事務所

NO.19 (2013年4月1日発信)

しっかい！

歩もう	つながろう
支えよう	広げよう
学ぼう	増やそう

■ご挨拶「お世話になりました」

藤田 佐和子

先月のメルマガで市民協の復興支援事務所コーディネーターとしての役割を終えることをお伝えしましたが、震災以降の約2年間、お陰さまで皆様方からのご支援により私の力量以上の被災者支援が出来ましたことを、ここに深く感謝申し上げます。

本来であるならば、福祉分野の中間支援組織として宮城県内のネットワークを再編成し、地域福祉の課題解決に向けて挑戦するNPOの発足を支援・育成することが求められていたと思うのですが、「パラソル喫茶活動」に専念させていただきました。

島津代表を始め、田中専務理事の柔軟な姿勢や大きな包容力の下、自由に活動させていただきましたことに本当に感謝しております。ありがとうございました。

3月29日(金)に、仙台市やパーソナルサポートセンターの出席をえて最後の「新しい公共の場づくり」の会議体会議を終了し、その後「パラソル喫茶チーム」のご苦労さん会をかねての情報交換会を行い、全ての活動を終了としました。出席した各チームの皆さんから異口同音に、「パラソル喫茶をやって良かった。声がけて頂いてありがとう！」という言葉がかけられました。各チームともに、食材費の一部支援がなくなるけれども、なんとか頑張って活動を続けて行くという頼もしい言葉を頂きました。

今後は、「おひさまくらぶ」の事務所の一角に机を置きますので、市民協復興支援事務所の窓口として支援を求められた時、支援が必要だと判断した時は、近藤理事のコーディネートの下、随時パワフルに活動していくと思いますので、引き続き応援をよろしくお願いいたします。

■近藤 明美「おひさまくらぶ」

24年度に受託した「宮城県新しい公共の場づくりのためのモデル事業」も藤田さんの頑張りのお陰でいい形で終了できそうです。今後、おひさまくらぶに事務所の機能が移りますが、被災者支援は細々でも続けていく必要を感じており、今まで共に活動してきた「パラソル喫茶チーム」もそれぞれ支援を続けていくとの意思を確認し合いました。



嬉しいことに、先日おひさまくらぶへ、山のように着物を送って頂きましたので、早速手作りをしている仮設の団体にお届けしようと思っています。皆さんも、被災地のことを忘れず応援して下さい。

■清水 和子「おひさまくらぶ」

復興支援事務所が一万市民委員会の間借りから広い現事務所に移った時は、これで支援物資もたくさん置けるし、ボランティアも泊れると思っていました。実際、支援物資は一時床を埋め尽くすほどだったこともあります。ただ、運び出す時がエレベーター無しのビルの4階から一つずつ抱えて階段を降りなければならず大変でした。それも今では懐かしく思い出されます。

今後、広い事務所は不要になっても、被災者支援の必要性がなくなるわけではありません。「パラソル喫茶チーム」の皆さんと力を合わせて息の長い支援活動を続けていきたいと思っています。

■復興支援事務所スタッフのメッセージ

大久 恵美子

東日本大震災のあった2011年の6月からこの4月まで、1年10カ月にわたり市民協の仙台事務所でスタッフとして働かせていただいたことは、「感謝」の一言に尽きます。

以前の仕事とは畑違いのため当初は右も左もわからない私でしたが、藤田さん始め近藤さん、清水さん、そして多くの関係者の方に支えられ、何とかここまで続けることができました。

パラソル喫茶やモデル事業を通して、色々な方と出会うことができたことも大きな喜びです。一方でスタッフとしての仕事の傍ら、NPO会計講座でも勉強させていただき、自らもヘルパー2級講座や傾聴講座を受講するなど、まったくの「企業人」で「福祉」や「市民活動」とは無縁だった頃とは、随分と様変わりしている自分に驚いています。

おかげさまで、少しは周囲に「NPOとは何か」「市民活動とは何か」を説明することができるようになりました。

私はこの4月で事務所を辞めることとなりますが、必要なときにはぜひお手伝いさせていただきたいと思っています。また今回の経験を次に活かしていきたいと思っています。

本当にありがとうございました。

穴戸 昭広

2012年5月より『宮城県「新しい公共」事業担当』として市民協仙台事務所スタッフとしてお世話になりました。ボランティアで「のんびりすみちゃんの家」の伊藤さんと知り合った縁でこの話を頂き、藤田さんをはじめとする市民協の皆様と、このモデル事業を通したくさんの事を教えて頂きました事、とても感謝しております。4仮設の支援は終わりますが何か手伝えることが有れば、また応援に行きたいとおもいます。

また、東松島市民として市民協会員の皆様から多大な支援、応援を頂いた事大変感謝しております。この場を借りてご挨拶させていただきます。

古賀リポート

本文は平成24年度新しい公共の場づくりのためのモデル事業（宮古市）の報告書として執筆したものです。

《総括》

この事業で創出したことは〈被災者にとっての場〉と〈支援者にとっての場〉の2つの「場づくり」であったと考える。

〈被災者にとっての場〉は、事業開始当初には“再会の場”として機能していたが、やがてこれまで知らなかった人との“出会いの場”へ、仮住まいの窮屈感をリフレッシュする場へと変わり、自分ができることを“発見する場”、さらには“これまでやってみたいと思っていたことにチャレンジする場”“となり”生きる力を高める場”へと発展したと考える。

一方、〈支援者にとっての場〉は、官民が単に横につながるのではなく、複数の組織がそれぞれの特徴や強みを活かし、複合的に関わることでの相乗効果がみられ、それぞれの組織が自らの強みに気づく結果ともなった。

もうひとつ、提示しておきたい事項として事業開始時に目標として掲げた“自律”と“自立”についてがある。心の自律”については、本報告書と事例集で提示したように“個人個人の心のケアに加え、仲間作りや自己発見、被災前と後の自己の統合につなげることができた”と考える。しかしながら、“自立”に関しては、未完であると言わざるえない。経済的な自立については、自立したとは言い切れないからである。次の課題として残るが、自立へ向けた方向付けは果たせたと考える。

このようにみても“自律”と“自立”は、本来は、被災者の方々を対象にしていたが、事業を行っていく間に〈被災者〉と〈支援者〉の双方にとって機能した結果ともなった。

行政機関と民間セクターが密接に協力した本事業は、被災生活を送る人たちに公平な支援を提供するための新しい手段としてのモデルとなるはずである。

震災から2年が過ぎ、各種支援が減少していく中で、公的サービスの対象から漏れてしまう人々が増えてくることが予想される。そういった人々への支援は福祉系のNPOが従来から行っており、得意としてきた活動である。今後も得意分野を活かしたサービスを展開できるように、複数のNPO、行政、さらには企業など各方面と協働して支援を続けていきたい。

（文責:古賀久恵）

本事業を通して、力をつけた2つのNPOは次のステップへと展開し始めています。

ひとつは新事業立ち上げ資金のスキームを利用し、布ナプキン製造販売事業を株式会社として始めました。もうひとつ宮古市のふれあいステーションあいは、地域作りへと事業を広げていく方向にあります。言葉としては消えてしまった「新しい公共事業」ですが、多くの成果を生み出すことができた1年間でした。

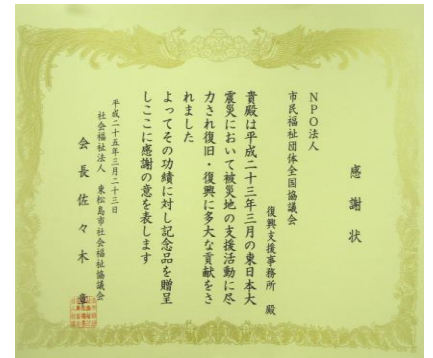
以上です。

とびっくす

◆感謝状

3月23日、復興感謝祭にあわせて東松島市社協より復興に尽力したということで感謝状を頂きました。34団体が受賞し5団体ずつ壇上に上がり、市長や市議会議長の見守る中、丁重に感謝状を頂いてきました。

近藤さんと2人で出席したのですが、思いだしたのは奇しくも最初のパラソル喫茶が、今日の会場の小野市民センターだったことです。当時は避難所として布団が敷き詰められていましたが、今日は様々な展示物（小野くんの人形やびびき工業団地仮設などでしこ会の作品等）が壁ぎわに添って飾られていました。



◆ナルクの新聞記事

市民協の仲間であるナルクの「パラソル喫茶活動」が河北新報に掲載されました。

日常の支援活動に加えて、仮設での喫茶活動をしており、周囲から高い評価をえています。特にハンドマッサージは老若男女に支持され、ナルクが訪問するのを待ち望んでいるようです。



◆第2回、若林区の支援者のための復興情報セミナー

・3月22日、上記セミナー第2部パネルディスカッションにて、復興支援事務所の2年間の取り組みを、たった5分間ですが話してきました。その後、課題についても少し…。他のパネリストは仙台市社協のみなし仮設担当者、仮設自治会長2人、若林区まちづくり推進課地域連携担当の方です。会場には、「茂庭台すずめの宿」の鈴木さん他2名、「さくら会」の西村さん、あかねグループの武田さんたちが出席していました。